

# 関東大震災はいかに回想されたか (三)

——自伝に描かれた関東大震災——

柴 口 順 一

(帯広畜産大学人間科学研究部門)

二〇一八年四月二十六日受付

二〇一八年六月二十一日受理

How was the Great Kanto Earthquake recollected? (3):  
The Great Kanto Earthquake described in an autobiography  
Junichi SHIBAGUCHI

## はじめに

前稿では、関東を除く地域の人々の証言を見てきた。関東大震災の被害は、東京・横浜をはじめとする関東地方が中心であったことはいまでもないが、それ以外はかなり広い地域にも及んでいた。また、直接的な被害がなかったとしても、地震の揺れはさらにそれ以上の広範囲にわたっていることが分かった。本稿では、東京を除く関東地方の記述を見ていくことにしたい。市町村の区分と名称はすべて現行のものであることは、これまでと同様である。  
なお、前稿までの目次を記しておく。

## (一)

### 1 海外——ヨーロッパ

- ドイツ——ベルリン・ハイデルベルク
- フランス——パリ
- イギリス——ロンドン・オックスフォード
- スイス——リュシユリコン
- 2 海外——アメリカ
- アメリカ——ニューヨーク・シカゴ・ポコノ
- メキシコ——メキシコシティ
- 3 海外——アジア
- ロシア——ウラジオストク・ユジノサハリンスク
- 韓国——釜山・ソウル
- 台湾——台北・基隆
- 中国——錦州・上海

シンガポール

4 海上

(一)

5 九州

熊本県——熊本市

大分県——大分市

福岡県——北九州市

鹿児島県——鹿児島市

6 中国・四国

山口県

広島県——広島市・呉市

岡山県——岡山市

愛媛県——宇和島市

7 近畿

兵庫県——神戸市

大阪府——大阪市・豊中市

京都府——京都市・宮津市

滋賀県——彦根市

奈良県——奈良市

和歌山県——新宮市

三重県——伊勢市

8 中部

愛知県——名古屋

静岡県——静岡市

長野県——軽井沢町・松本市

富山県——高岡市

9 東北・北海道

福島県——福島市・会津若松市

宮城県——仙台市

山形県——米沢市・鶴岡市

秋田県——秋田市

北海道——札幌市

10 関東

群馬県

大川博(注1)は高崎市にいた。東京鉄道局に勤めていた大川は、講習会のために八月三十一日の午後に汽車で高崎に向かった。八月三十日に横浜、三十一日には国府津で講習会を行ない、その夜は熱海に一泊する予定であった。だが、九月一日の高崎での講習会も担当するようになるとの電報を受取り、急遽高崎に向かったのである。「九月一日、講義のまっ最中に、例の大地震に見舞われた。すべての交通と通信機関が途絶したので、高崎では、やれ浅間の大噴火だの、大島の爆発だの、京浜一帯が海にめり込んだの、いやもう、いろいろな取りざたで大騒ぎになった」が、「夜の九時ごろになって、やっと東京に大火災が起こっているという確報が入って来た。」と記している。翌朝、ようやく動き出した汽車に乗り込み、夜遅くに東京の自宅にたどり着いたという。

ところで、国府津の講習会までは同行していた人物がいた。同僚の伊東という人物で、彼は予定通り三十一日は熱海に泊まり、翌一日の列車で帰京する途中、根府川の鉄橋で遭難したという。「そのとき、根府川では、地震の襲来と同時に、下り列車が海に転落し、上り列車も土砂くずれのために四、五両目ぐらまで鉄橋下に埋まり込んだ。伊東君はその前方車両に乗っていたらしく、山津波の土砂に埋められ、その遺体は六カ月後になってようやく掘り出された。」と記されている。大川は最後に次のように述べていた。「運命というものの動きは実に摩訶(まか)不思議である。もしここで私が高崎へ回るよう本局からの電命がなかったら、私も伊東君と熱海行をともし、したがって当然、翌日の根府川遭難をともししていたことは疑いない。またかりに、本局からの指名がアベコベであったらどう

なつていよう。根府川の遭難が私で、高崎行で命拾いしたのは伊東君であつたのだ。」

中村歌右衛門（注<sup>2</sup>）は渋川市にいた。歌舞伎役者五代目歌右衛門は、妻と息子夫婦とともに伊香保の別荘に滞在していた。「丁度おひるの食事にかゝらうとした時グラグラ／＼はじまりました。伊香保は地震の眊い所ですから、地震ではあるまい、浅間の噴火でしよう、などと云つて居ました」と記している。続けて、「立つて廊下で見て居ると、池の水が動いて居ます。地震だよ、錦魚が鉢合せするぢやないか、といひました。」と記されているが、「地震だよ、錦魚が鉢合せするぢやないか」といったのは、たぶん家人である。このあたりの記述、実は主語がはっきりしない文章が目立つのだが、歌右衛門ははじめ地震を否認していたのである。そのうちにおさまつたので、食事を済ませて釣り堀へ出かけるが、途中、知人会うと汽車が不通だという。それに対して、「どこかで故障でしょう」と答えたのもそのためである。釣りを終え、四時ころに家に戻る。その部分に、「あれから、ちよい／＼揺りましたが、分りませんか、といひます。」という記述があるが、これも家人の言であろう。おそらく、歌右衛門は釣りをしていたこともあり、その後の揺れを感じなかつたのであろう。地震を否認し続けていたのもそのためといえる。夜になり、茶屋の男が来て「東京に地震があつて、大変な火事が起りさうだ」といったが、「馬鹿をいふ」と取り合わなかつた。

翌二日の朝三時頃、というから夜中である。たぶん付き人か使用人であろう、貞吉という人物がやつて来て、「ビツクリなすつちや行けません、東京全滅だ、といひます。上の御客が自動車で東京へ帰るさうですが、割前さへ出せば一所に帰れますから、様子を見て来る」といった。続けて、「金を余分に持つて行け」といつて立たせたとあるから、この時点で地震を認めたのであろう。だが、その日は何の沙汰もなく、電話もなく新聞も来なかつた。三日になり、「朝鮮人が来た、といつて青年団が竹槍もつて警護に出」たという。「いま、鮮人が渋川へ来て、井戸へ毒薬を入れたとか、中野という処の豪家へ押込みがはいつて、主人が竹槍で眼の玉を突かれたとか、榛名で宝物を持つて行つたとか、物騒な噂ばかりです。」と記されている。「伴なんかピストルもつて、夜も眠りません。」とあるが、その

ような物騒な物をなぜ持ち合わせていたのかは不明である。四日の朝、先の貞吉が東京から帰つて来て、自宅は焼けておらず、もう一人の息子藤雄も無事だと分かつた。それから一週間後の十一日、息子の藤雄が自家用の自動車でもつて来た。十三日、歌右衛門はその車に乗り東京へ帰つた。「板橋あたりで、人が荷車に乗つたり、女が襷がけで哀れな有様です。私はゾロリとしてキレイな足袋をはいて居ます。皆チロ／＼見るからキマリが悪い。宅へ帰つて見ると、電気が暗い、来る人は皆泣く、それがまるで乞食みたいな風をして居ます。」とその時の様子が記されている。「何か遣らうと思つても、家内は伊香保に残してあるから様子がわか」らなく、早く戻りたかつたが、翌十四日と十五日は大変な雨であつた。川が切れて道が止つたということで、十六日になりようやく伊香保に戻ることができたという。

#### 栃木県

片山哲（注<sup>3</sup>）は宇都宮市にいた。弁護士をしていた片山は、足尾銅山の鉱夫が爆発物取締法違反に問われた事件の弁護のために、宇都宮裁判所に行つていた。「その事件の弁論をやつている最中に、丁度お昼頃、関東大震災が起つたのである。」と記している。「裁判官も驚いた。東京は全滅であるとか、東京に大火が起り、関東一円は大騒ぎになつて居るといふわけで、裁判はそのまま延期」になつたという。急いで帰ろうとしたが、なかなか東京には戻れなかつた。片山がいつ東京にたどりついたのかははっきりしないが、三日には戻つていたと思われる。

私の家はその頃丁度日暮里の駅の上にあつたが、三日目の晩に、ずっと火が東の方に移り、上野松坂屋が焼け、根岸方面、下日暮里から鶯谷にかけて燃え移り、避難民は、箆筒、柳こりりを大人車につんで逃げて来る、全くの大騒ぎであつた。この際にいわゆる朝鮮人問題がもちあがつたのである。町に火をつけたのは朝鮮人だとか、この機会に朝鮮人が、暴動をたくらんでいるとか、全くの悪質極まる流言飛語で、大騒ぎを演じたのである。私の近所の人が多数やつて来て、私の家の縁の下に、朝鮮人が入つた。それ捕えろ、いや井戸に劇薬を

投じた、それはその朝鮮人の仕業だということ、今考えても、情ないほど、まことに文化程度の低いお粗末な国民の気風であった。

片山は、大杉栄と伊藤野枝らが甘粕憲兵大尉に絞殺されたこと、南葛労働組合の平沢計七らが暗殺されたことにも触れている。

手塚富雄（注4）は夏休みで郷里の宇都宮市に帰省していた。手塚は東京帝国大学の学生であった。「九月一日、私は夏休みの断末魔の気分のなかに、私のいつもの相棒である高梨と、私の家の部屋に寝ころんで雑談していた。正午まぎわに起った地震は、しだいに強く、思わず二人は腰をうかした。近所の人々が、そとへ飛び出した物音も聞こえた。あとは何度かの余震がつづいたが、たいしたこととはなかった。」と記されている。東京の被害はその日のうちに伝わって来たというが、何によって知ったかは記されていない。「周辺との交通も通信もどたえた東京での被害と人命の犠牲はおそろべきもので、東京駅や丸ビルも倒壊したらしいというニュースを、往来での立話に私に語った一人の友人は、そのふだんの冗談ずきも影をひそめて、ただ青い顔をしていた。」と記している。二日目、三日目になるにつれて、耳に入る惨状はいよいよひどくなってきた。人々は情報を求めて停車場に集まったという。汽車に乗った罹災者や脱出者が日毎に増してきたからである。何日のことかは記されていないが、手塚もまた情報収集のため、先の友人とともに夕涼みがてら停車場に出かけた。「汽車が、ちょうど東京方面からついたところらしい。改札口の前には、おのずから大きな人垣ができていて、はげしい喚声をあげていた。下車してくる罹災者のなかから鮮人らしいものを、この自然発生の黒山がつかまえて訊問しているのである。日本の全災害の原因が、この網にかかった少数の人間の肩におかれている感じであった。」とその時の目撃談を記している。続けて、「鉄拳はとび、波のようにあがる喚声は、それにたいする少数の警官の制止をやぶろうとする攻撃の声である。警官自身が、朝鮮人の身元や行先をしらべ、べつにとがめるべきことを見出さず、釈放しようとする」と、民衆は倍加した叫びをあげて、その獲物に殺到した。」とも記されていた。

江口渙（注5）は那須烏山市の実家に帰っていた。江口は、結成間もない日本

社会主義同盟の中心的人物として活動していた。だが、地震発生時のことについては記されてはならず、直後に二度東京へ行ったことが記されている。一度目は九月二日で、汽車で川口まで行き、夕方に大混乱の東京に入った。五日に一旦戻り、七日の午前にまた出かけた。東京に住む弟の荷物を運んで来るために、二台の荷馬車を連れて行った。東京までは四日かかったという。荷馬車を弟に渡し、十二日に一人で帰って来た。「その頃にはさすがの朝鮮人さわざも一だんらくついていたし」、「自分たちがやってのけた有史以来の大残虐に対して、少しは反省の芽さえ出しはじめていた。」と記されている。ところが、別に新たな事態が持ち上がった。それは私が「朝鮮人の放火掠奪」「社会主義者の暴動せん導」の、烏山における中心人物に、いつのまにかされていた」ことである。「家の縁の下には、爆弾と石油を入れたビール瓶が一ぱい隠してあるとか、朝鮮人が每晚私の家集って烏山焼き打ちの相談をすすめているとか、私の姉が町と井戸という井戸に毒薬を投げこんで歩く準備をしている」といったデマが町全体に流れていたというが、その後どうなったのかについては記されていない。江口は、大杉栄と伊藤野枝、甥の橋宗一が憲兵大尉甘粕正彦に暗殺されたこと、河合義虎、平沢計七ら社会主義者十数名が亀戸警察で殺されたことなどにも触れている。

#### 千葉県

木村毅（注6）は市川市にいた。木村は出版社の春秋社に勤めていた。その日は「朝おきてみると、母屋の床下から、新築の離れ座敷の方へ、鼠が大群をなして、移動していた。」という。「ふしぎなことも、あるもんだなあ」と思いながら、別にそれ以上のことは考えなかった。「昼前になって、一家（といって私と家内と、三歳になる女兒と三人）で食事を始めようかと思うと、急に、床下から突き上げるような衝動を感じて、それからぐらぐらと、激しく家が左右にゆれ出した。「見ると、梁の柱とぬり壁の合わせ目が、ギクギクと鳴って、隙間が開いたり、閉じたりしていい」た。「台所と風呂場の間の土間にすえていた水がめに入れていた大きな西瓜が、一ぱいに汲んでいた水にのって、右に左にゆれていたが、ついにぽんとほうり出されて、割れて、真っ赤な口を開いた。」といった、まるでスロー

モーシヨンの映像を見るような記述もある。「夜に入ると、前面は一円、炎の海となつている。」と記されているが、「前面」とは東京方面のことをいっているであろう。「ここに至つて、容易ならぬ大地震であるとの実感がおこつた。」と記している。三、四日たつて汽車が動き出したので、神田の春秋社へいったが、社屋は火災で焼失していた。だが、「幸い紙型をおさめていた倉庫は、都心をはなれたところにあつたので」その後の出版に差し支わりはなかつた。震災のため「地方販売店の書棚は、からツけつになつて、あたかも真空を埋めて颯風のおこる如き勢いで、すさまじい注文が殺到し、焼けのこつた紙型で、刷つても刷つても追いつかない。紙に活字さえ印刷してあれば、何でも売れるという時代がきた。」という記述もあつた。

町田敬二（注7）は、千葉市にある陸軍歩兵学校付属教導連隊に小隊長として赴任していた。「マグニチュード七・九がグラグラツときた時、すぐにアタマに浮かんだのは東京の両親の安否であつた。」と記している。そこで、「許可をえて私は余震のおさまらない千葉街道に愛用のオートバイを飛ばした。」という。町田は千葉市内の民家に下宿をしていて、母に買つてもらつたオートバイで連隊に通つていた。そのオートバイで、両親の元に駆けつけようとしたのである。「その晩は猛火と阿鼻叫喚の中を両国橋付近の焦土で明かして、翌日「〇〇人の一団が大山街道を東進中」という流言蜚語を聞きながら私は、どよめきと灰燼の廢墟を徒歩で潜り抜けて、辛うじて虎ノ門まで辿りついた。そして東伏見宮邸に避難させていたでいた老父母の姿を見たときには脆くも涙がこぼれた。」とその時のことが記されている。その翌日、というから三日であろう。町田は千葉に戻つた。だが、「千葉では、一コ小隊の兵力をもつて那古、船形地区の警備に當ることになつた。船形観音の大伽藍は前がわにつんのめつて崩折れていた。」と記されているだけである。

麻生磯次（注8）は山武市にいた。麻生は東京帝国大学の図書館に勤務していたが、夏休み前に辞職し郷里の山武市に帰つていた。地震発生時のことについては記されていない。「昼の間はそれほどでもなかつたが、余震がひっきりなしにあるので、だんだんこわくなり、夜は庭に戸板を敷いて遅くまで起きていた。西

の空はまっ赤にそまつていた。」と記されているだけである。世話になつていた知人が心配になり、三日目に家を出て汽車に乗つたが、食糧を持参していなかつたため津田沼で降ろされたという。そこから東京に向かつて歩き、市川の知人の家に一泊し、翌日東京に入った。「路傍にはまだ死体が残つており、異様な臭気がただよつていた。」と記されている。また、「東大の図書館は焼け落ちて、三階の貴重書はすべて灰燼になつていた。」とも記されている。知人は無事だったので、翌朝早く家を出て、汽車に乗つたが、のろのろ運転で成田に着いたのは夕方であつた。そこで一泊し、あくる日の昼ごろに帰宅した。「両国から二時間くらいのところを、二日がかりで帰つたのである。」と記している。

猪田喜三郎（注9）は九十九里町にいた。錦城商業学校の学生であつた猪田は、母親、弟、叔父の四人で別荘にいた。夏休み中で、九月七日が授業はじめのため、五日までの滞在予定であつたという。「昼食を終えて、離れ座敷で、食後、大字になつていると、ゴウウという地鳴りのような音とともに、さあ第一震である。今にも片貝の家はつぶれるのではないかと思つた。」と記されている。続けて、「夕方には紙の焼けたものが沢山に飛んで来た。深川の区役所と読み取れるものやら下町の焼けた灰である。」と記している。夜の九時過ぎ、東京にいる父の使いの者が見舞いやつて来たというから、ずいぶん早い対応だつたといえる。使いは自転車をやつて来て、翌日再び自転車で帰つて行った。

宮嶋資夫（注10）は南房総市にいた。宮嶋は、すでにプロレタリア文学の作家として活躍していた。昼食のためにうどんを買に行つた帰りであつた。「私の家の曲り角近くになつたとき、ゴーツと凄まじい地鳴りがしたかと思ふと、大地が揺れて、立つておられなくなつた。私は慌てて、道路の片側の小さくなつた所に飛び上つて、そこに生えてゐた木の幹につかまつた。が、足の下の土がくずれるのである。」と記している。続けて、「槇の並木は、根本からざわざわと揺れてゐた。とそのとき、前の家の屋根瓦がザーツと一せいにくずれ落ちて砂塵が巻き上つた。そのときはじめて、地震だ、と思つた。もはやどこにも、逃げるべき所はない、どこもかしこも揺れてゐるのである。全く尽天、尽地揺れてゐる。自然の威力が、ただ、じかに身に泌みだつた。」と興奮気味に記している。ようやく揺れ

がおさまった頃、家に帰った。家といつても部屋借りで、そこに大家の婆さんと孫娘が同居していた。婆さんは平然として家仕事をしていた。「婆さん、揺り返しが来るぞ、そんな屋根の下にゐたら危い」と声をかけ、太い枝を張った木の下に避難した。「と、そのとき烈しい揺り返しが来た。下の畑の小川の向ふにある家の土蔵が、ぐらぐらとくずれ落ちた。」という。地震には津浪がともなうと聞いていた宮嶋は、もつと高いところに避難することにした。住んでいた場所は小高い所であったが、どんなことが起るか分からないと考えたのである。余震は絶えず襲って来たが、少しおさまったころを見て役場の後ろの山に登った。そこにはすでに大勢の人たちが集まっていた。「私は嘗て聞いた、三陸地方の大津浪のことなどを思ひ浮べてゐた。が、津浪は已に、地震と同時に来て、布良では沿岸の家をさらい、漁業組合の金庫を、海の中の岩の上まで運び去つてゐたのである。」と記されている。海岸では実際に津浪の被害があつたのである。その夜は家から夜具を運んで来て、野宿をした。「大地の上に布団を敷て仰向けに寝ると、背中に絶えず地鳴りを感じた。ゴーツ、ゴーツ、と、何処から起つて来るか判らないが、恐ろしく底力のある響きである。地球が壊れてしまふのではないかとも思つた。そして地鳴りが烈しくなると、ぐらぐらと大地が揺れた。」とその夜のことを記している。

翌日は快晴であつた。宮嶋は友人の宮地とともに東京に向かうことにした。実は地震の二日前の八月三十日、妻と子供が東京へ帰つていたのである。子供たちの転校は学期のはじめがよいと考えたからである。もともと東京に住んでいた宮嶋らは、一時的に南房総に居を移していたのである。妻子を見送つた夜に宮嶋は夢を見た。「恐らくその朝館山に妻子を送つて行つた印象が残つたためであらう。」といつているが、翌々日の震災を予兆するような夢であつたともいえる。

そのときまだ、三つ位だつた末の女の子を抱いたウラ子が、坂道のような所を、何に乗つてゐるのかすべり落ちて行くのである。私はそれを止めようとあせつたが、ウラ子は已に下の方に運ばれてしまつてゐる。彼女は別に驚く風もなく、にこにこ笑つてゐた。そして姿が見えなくなつてしまつた。

妻子が去つた翌日から、先の宮地と隔日の当番で自炊をすることにした。宮地の妻もまた臨月のため東京に帰つていた。三十一日は、二人だけの寂しさからか、いつもより酒の量を過した。そのために翌一日の朝食が食べられず、昼飯にうどんを買いに行つたというのであつた。

大家の孫娘が作つてくれた二日分の弁当を持つて出発した。はじめはあまりひどい被害はなかつたが、次第に被害が大きくなつた。途中、館山から来た人に出会い、館山は全滅だと聞いた。館山に着くと、はたして全滅であつた。「駅の前には、ゆかたを着た死骸が五つ六つ並んでゐた。顔にはカンカン帽子がかぶせてあつて、その上に銀蠅がとまつてゐた。両側の家は倒れて道もなかつた。警察の前には、皇居炎焼中の由、といふように張り出されてゐた。」と記されている。日暮れに保田に着いた。館山から海岸線を北上した所である。人々は「皆な高い鉄道線路に TENT を張つて避難していた。」という。なぜ線路に TENT を張つていたのかは説明されていないが、「高い鉄道線路」とあるように、おそらくは津浪を避けるために少しでも高い所ということだったのである。鉄道はむろん不通であつた。その夜は TENT に泊めてもらつた。翌朝、TENT の主人からひとまず帰ることを勧められた。館山から汽船も出るようになるかも知れないし、いずれにしても、もつと食料の用意をして行くべきだといふのである。前の晩、東京から逃げて来た人から、食糧不足を警戒して沿道の人々はいくら頼んでも分けてくれないといふ話を聞いていたからであろう。宮嶋らはその言を聞き入れ、一旦家に戻ることにした。

翌日は一日休息して仕度を整えた。その際、警察の証明がないと移動できないことを知つた。「内地人たることを証明するためであつた。」という。二人は館山の警察に行き、首尾よく証明書を手に入れた。それからは「黙つて無暗に歩いた。」というが、今度は館山から東に向かつた模様である。「江見あたりは地割れがひどかつた。一尺位口を開けた所もあつた。橋は両方の裾で千切れて、ギツコン・バツタンのようになつてゐる所もあつた。」と記されている。江見は房総半島の東岸に位置している。なぜコースを変えたのかは記されていないが、先に保田ま

で行った際、被害がひどくまた鉄道も不通だったためではなからうか。ある所では二人の青年に誰何されたが、証明書を見せると「よろしい」といった。どうして調べるのかと聞いたら、「姿が朝鮮人に似てゐるからだ」と答えたという。日暮れに鴨川に着いた。江見から海岸線を北東に進んだ所である。役所では天幕を張り、避難者を收容していた。その晩はそこに泊まった。翌朝早く発ち、清澄からバスに乗ったというから、今度は内陸の方へ移動したことになる。続けて、佐倉からは汽車があったというから、バスで佐倉まで行ったのであろう。汽車に乗り込み、市川で降りた。すでに東京も目の先という所まで来たのである。市川には友人の木村毅と弟がいたからである。木村の家を訪ねると、細君に「またもや「朝鮮人」に間違われた。「色が余りに真黒いし、着物が変つてゐるので」とのことであつた。先に誰何されたのもそのためであらう。木村の家は何の被害もなく「全く別世界のよう」であつたと記している。先に木村の自伝に触れたが、そこには宮嶋の訪問については何ら記されていなかった。翌朝は弟の家を訪ねた。昨日東京へ行って来たといひ、妻子も父母も無事だと聞き安心した。

翌日は、「髪の毛を七三に分け、カンカン帽子をかぶり、浴衣を着て出かけた。」といふ。「朝鮮人」に間違われぬようにするためであることはいうまでもない。それまでは、「黄ビラのそでの大きい襦袢を着て、白い半ズボンをはき、台湾帽子を被つていた」のである。ところで、この日はたぶん、地震発生から丸一週間になる八日である。宮嶋は、これまで翌日、翌朝、といった記述を重ねて日付を記していないが、それを順に追つていけば八日になる。いよいよ東京に足を踏み入れる。「亀井戸カメイの小さな川の橋は落ちてゐた。小舟を並べた上に渡した橋が出来てゐたが、その傍には十ばかり死骸が浮いてゐた。弁慶格子の単衣を着た、男の子が、うつぶせになつてゐるのが眼にしみた。日蓮宗の坊さんが来て、回向した。その人はそうして回向して歩いてゐるらしい。尊い姿だつた。私もあとに立つて合唱した。」と記されている。また、「両国橋の裾で、兵士が行人のステッキを没収してゐた。橋の下には無数の死骸があつた。若い女の、仰ほ向けになつた姿が、赤い布地、そして大きな氷のうのようなものが、飛出してゐた。銀行らしい建物の入口に、坐禅を組んだような死体があつた。瓦斯で顔もふくれて、口が

丸く開いてゐた。布袋の姿が連想されて、解脱した人のような気がした。柳原辺から九段坂が見えた。眼を遮ぎるものもない。」とも記されていた。だが、弟がいつていた通り、家も家族も無事であつた。

翌々日の晩、すなわち十日の晩、夜警の詰所に出ていると刑事が来た。聞きたいことがあるといわれ同行すると、保護検束だといわれた。「憲兵が没常識で、何でも彼でもつかまへる、殺す」ということで、「本当に保護だ」というのである。刑事の話では、「不忍の池に鮮人が、竹の管を口にして池の底に沈んでゐたとか、亀井戸カメイ附近で、小舟に砂を積んであつたのを調べて見たら、底にはダイナマイトが一杯あつたとか、麴町の通りに大きなビスケットの罐が落ちてゐたのを開けて見たら、火薬であつたとか、それが凡て鮮人のした事だ」というのであつた。だが、木村毅の細君からは次のような目撃談を聞いていた。

家の前を兵士が多く、鮮人を連れて通つてゐた。恐らく鴻の台へ連れて行くためであつたらう。その中の一人が身体が悪いのか少し遅れた。馬上の兵士が何かいふと、鮮人もそれと応答してゐたが、兵士はいきなり剣を抜いて一太刀切りつけた。丁度町の警防団の青年が集つてゐた前だつた。兵士は自分で切りつけておいてから、警防団の諸君頼む、と云つて馬を走らせて、行つてしまつた。青年達は、鳶口や竹槍で、鮮人を殺してしまつた。する前の床屋の主人は、日本刀を携えて来て、倒れてゐる死体をまた突き刺したそうである。

警察に行つた宮嶋であつたが、「十日経つても帰してくれなかつた。」という。署長に会い、自分もしなければならぬことがあるから帰してくれと頼むと、東京を離れるなら帰してもいいという。そこで、再び戻ることになった。出発したのは十八日であつたと、久しぶりに日付が記されている。十日の晩から「十日経つて」といるとしたら二十日になるが、十日あまりということだったのか、あるいはその前までの日にちが少々混乱していたのかは分からない。それはさておき、帰りは輸送船に乗つた。「お台場の小さな大砲をのせた台も壊れて、砲が半分海につかつてゐた。観音崎あたりでひどく揺れた。」とそのときの様子が記されてい

る。館山で船を降り、警察に寄る。同道した監視役の引継ぎのためである。夜の九時過ぎに家に着いた。やがて、大杉栄が殺されたことを知った。「パリから帰つて本を送つてくれたとき、近く上京したらゆつくり会いたい、と言つてやつたが、ついに会へなかつた。」と宮嶋は記している。

及川道子(注11)は館山市にいた。宮嶋資夫が二回も訪れ、「全滅」と称していた場所である。及川は十一歳の子どもであった。「いよ／＼今日から九月といふ日は、朝早く、通り魔のやうなひどい嵐があつて、それが過ぎた後は、また気味の悪い程のい／＼お天気になりました。」とその日の天候が記されたあと、次のように記している。及川は、妹と従姉の三人でままごとをしていた。

お茶の間の窓近くには、大きな橙の木がありまして、その実をとつては遊ぶでみたのですが、丁度強子がそれを採らうとして、窓から手を伸した瞬間、不意に沖の方で雷の鳴るやうな音がしたかと思ふと、いきなり、ミリ／＼、バーン／＼、ガタ／＼ツ!!と云ふ物凄い響と共に、柱は折れ曲り、襖障子は弾け飛び、壁は崩れ落ち、家は今にも揉みつぶされるやうで、畳はまるで波のやうに揺れうねり、棚の上のものは何一つ残らず転げ落ち、一瞬にしてあたりは言語に絶した修羅場と化してしまひました。

地震の時には慌てて外へ出てはいけなないと日頃父親から教えられていたことを思い出し、「三人一塊となつて、畳に俯伏してしがみついて」いた。いや、「出やうにも、どうしやうにも、立つことはおろか、腹ばふことすら出来ない」のであつた。揺れが少し小止みになつたすきを見て弟たちが外へ飛び出した。それを見ながら自分たちも出ようとしたその時であつた。「前よりも一層物凄い地鳴りと共に、もつと激しい震動が襲つて来たと思ふ間もなく、倒れかゝつてゐた柱、崩れ残つてゐた壁、そして落ちかゝつてゐた天井が、この時とはかりに、鋭い悲鳴をあげて一時に私たちの上に覆ひかぶさつて来」たのである。あたりは真暗闇となり、何も見えなくなつた。「天国にでも遊んでゐるやうな、淡い夢心地——死といふものはこんなのかも知れぬ、ぼんやりと、そんなことを考へてゐた」とその時の

気持ちが記されている。だが、ふと気づくと板の割れ目から一条の光線が見えた。及川は声を限りに父親に助けを求めた。幸い、父親からも応答があつた。「私は、急に、助かるぞといふ安堵のためか、ぎゅつと締めつけるやうな重い圧力を身体中に感じ出しました。」と、その時の気持ちがまた記されている。救出は難行したが、三人とも無事であつた。ただ、妹の強子は怪我を負つていた。無事救出され、庭の橙の木の下でホツと一息ついていると、またしても大きな震動がやつて来た。「薄気味悪い地鳴り、亀の甲形に裂けて行く地割れ、そこから噴き出す水、そしてあちこちに起る人畜の悲鳴——これこそ、全くこの世の終りかと思はれました。」と記している。

やがて、津浪が襲ってくるかも知れないという警報が伝わつて来たので、山の方へ逃げることになつた。妹だけ怪我をしていたので米屋のリヤカーを借りて運んだ。山の上は避難の人々で一杯だつた。「泣くもの、喚くもの、唸るもの、また傷けるもの、死せるもの——折柄後の森に沈まうとしてゐる赤い夕陽に照らされて、それらの人々の姿は、戦乱の巷もかうあらうかと偲ばれるほどでした。」とその時の様子を記している。その夜は毛布を敷いて寝た。だが、地震と津波に対する恐怖に加えて、隣村の山火事がこちらにも移つて来そうに見え、ほとんど眠ることはできなかつた。翌朝、ふと寝返りをうとうとすると胸のあたりに痛みを感じた。恐る恐る手を触れると、いつの間にか包帯が胸に巻きつけられていた。屋根の下敷きになつた時に肋骨が折れ、寝ている間に手当されていたのだという。「段々明るくなるにつれて、周囲に目をやると、右にも左にも、前にも後にも、頭や手や足を繃帯した怪我人や、むしろや布切に包まれた死人が無数に転がつてゐます。私は今更ながらその惨状にゾツとしまひました。」と記している。

#### 埼玉県

高木市之助(注12)はさいたま市にいた。高木は浦和高等学校の教師をしていた。「浦高時代の出来事といえは何といつても関東の大震災で、それが私の国文学に大きな影響を与えた」と記しているが、地震発生時の具体的な記述はない。ただ、「私の一生でアナーキーの実体を身を以て体験したのは震災後の数日間」だつた

と記され、「とにかく震災をうけて、人々は唯茫然として、どうしていいかわからない。そんな時には善意と勇気が悪意と謀略と闘う大混乱が社会を支配するということを思い知らされたのです。」と記されている。また、「浦高の地元の生徒は召集され組織されて、国鉄や中山道筋の秩序維持に当り出しました。」とあり、「私も一隊の学生を引率して東京の職員生徒の動静を調査に出かけて」、「毎日手分けして各区を探しては立退先を確かめて浦和に帰って報告したりしました。」とも記されている。浦和高校では、生徒の半分くらいが東京から来ており、教師も大半は東京から通っていたからである。

石井源一（注13）は夏休みで郷里の川越市に帰省していた。東京高等工業学校の学生であった石井は、二学期の授業開始が九月十五日からなので、八月三十一日の夕方に再度帰省していた。翌九月一日はのんびり朝寝をした。「母が昼食の仕度を終えて家族が茶の間に集ったとき、あの関東大震災といわれる大地震が起きた。」とあり、「棚の物は落ちるし、立ってられないほどの大揺れであった。」と記されている。しかし、「我が家は、藁葺屋根のためと地盤がよかったので、古い家なのに被害は余りなかった。」という。午後二時頃、「近所の人が騒いでいるので外に出て見ると、南の方に大きな入道雲とその右に小さい入道雲が見えた」。午後四時半頃、東京の方から来た人が水を飲ませてくれと立ち寄った。その人の話によると、「東京は地震のあと大火災で全滅だ」ということであった。夕方になりあたりが暗くなると、「昼間見た大入道雲は真赤になって、東京、横浜の火災を知らせた」。翌二日からは、「いわゆる朝鮮人騒ぎ」がはじまった。「家の前に腰掛を出して道路に縄を張って、近所の人数人と通行人を検問した。井戸に毒を投げ込まれるから蓋をしろ、知らない人から食物をもらうななど、流言蜚語が乱れとんだ。夜は、すぐ近くの畑まで朝鮮人何十人が押し寄せて来たなど、全く根も葉もない噂ばかりであったが、当時としては真に迫った話なので、みな極度の緊張状態の数日であった。」と記されている。

山田弥一郎（注14）は所沢市にいた。繊維問屋に勤めていた山田は、得意先から駅に向かう途中であった。「八百屋の店先から西瓜やかぼちゃが道路へ転げ来るし、牛車が牛方なしで荷車を引いて来るとか、人々は皆戸外に飛び出して恐怖

の状態でも右往左往していた。」と記している。列車は不通となり、東京に帰ることもできず、余震の恐怖のなか駅員から情報を聞き出した。「東京は全市火の海となつている」とのことであった。そのうち、一台のトラックが来て東京方面に行くというので、便乗し帰路に着くことができた。「車の上から東京方面を見ると、空に大きな入道雲が出ていた。また東京に近づくと、各戸から畳等持出してその上に避難していた。」とその時の様子が記されている。中野、新宿を通り、四ッ谷で車を降りた。それからは歩きで、日本橋の店にたどり着いたのは夕闇が迫った頃であった。自分を最後に店員全員が集まったので避難することとなった。まずは日本橋の川崎銀行の建築場に行ったが、真暗闇で再度地震が来れば心配だと思ひ、率先して宮城前へ行くことを主張した。店に帰る途中、宮城前ならば安全だと思つたからである。宮城前広場は避難の人でほぼ埋まっていた。「四方を眺めると僅か四ッ谷方面に火がなく、その他は全部空が真赤になって物すごい破裂音が絶え間なく各所から聞えて来る。また余震も度々あったが、これに対しては心配もなく真暗の空を眺めて野宿した。」と、その夜のことが記されている。

翌日、店の様子を見に行つた店員によれば、店のほとんどは焼失しているとのことであった。だが、幸い同族会社の所有する九段茶寮という建物が焼け残つたので、その日のうちにそこに全員避難した。ところが、食料と寝具がない。「その日は市の炊出しの握飯一個を貰つて大通で立食したのを覚えている。早速食料の確保に奔走したが、買って来たのは玄米で、これを大きな鍋でおかゆのように炊いて一時の飢えを凌いだ。大熊染工場（今の東伸繊維）から握飯、沢庵を届けてくれた。また、得意先からも順次米だとか野菜等を頂いた。」と記されている。また寝具については、「布団を探しに焼残つた街に布団屋へ行つたところ、丁度蒲団の綿入時で、皮は無いが綿だけならあるというので布団二枚分の古綿を買つて帰つた。」と記されている。このように、山田らは一夜の野宿だけで済んだが、宮城前広場の混乱は大変なものであった。他の場所の情況も含めて次のように記している。

宮城前避難所では病人や産気づく婦人も出来、早速救護班が天幕を張つて救

援に当たった。夜が明けると空腹を感じる者が出て、東京駅ガード下の食料品店とか菓子屋とかは忽ち空になった。御堀の水もそのまま飲んでいる人もあった。時が立つに従い各地の情報が伝わり、また市内の惨状が目あたり出現して、市電の中で腰かけたまま死んでいる人、あるいは堀とか河川には溺死している人、中でも最も悲惨なのは本所被服廠跡と浅草のひょうたん池で、被服廠跡は面積も広く家財道具を持込んで避難した人が多く、これに火がついてここにいた人は全員焼死した。また浅草公園のひょうたん池は逃場を失った人が池に飛込んで死んでいる。その他各方面での焼死者は数限りない有様だったが、不思議な事は浅草の観音様は焼けなかった。

九段に仮営業所の看板を掲げ、九月十日頃から商売を再開したが、焼け跡の店を処理する仕事もあった。「店の焼跡には大金庫がそのままあるので毎夜数人で暗闇の道を通って金庫番に来たが、途中で自警団に日本刃を目の前に出され何処へ行くかとただされビクツとしたが、恐れず日本橋伊勢町へ行くという通れといわれ、朝まで焼跡で金庫の番を交替でやっていた。」という。数日して金庫もさめてきたので、金庫屋を呼び開けてみると幸い帳簿金銭等は無事であった。

### 神奈川県

関根弘(注15)は箱根町にいた。だが、関根はまだ三歳の幼児だったので、その記憶がどこまで信じられるかは分からない。祖母の監督のもと、従兄弟たちと一緒に射的屋の二階を借り一夏を過ごしていたという。「そこへグラグラがやってきた。射的屋の前の崖だか、石垣が揺れていたのをおぼえている。」と記している。何日かして父親が迎えに来た。登山鉄道が不通だったので小田原まで歩いた。それからどういうコースをたどったかは覚えがないが、日暮里の家に帰ると家中被災した親戚であふれていたという。家は当時としては珍しい三階建て料亭をやっていた。屋号は「保坂」という。「三階屋でも地震にビクともしなかったのは、三階が坂に面した玄関で、一階が地下二階になるような構造で坂に密着して建てられていたからだろう。」と関根は説明している。「保坂」の縁の下に朝

鮮人が逃げこんだぞう!」。「震災で人心が動揺したとき、たくさん朝鮮人が殺されたが、そんな声が聞こえてきたこともあったという。大地震のあとはゆりかえしがこわいというので、その後、地震があるたび、庭の大きな木の下にゴザをしいて安心できるまで坐っていた。」という記述もあった。

岸井良衛(注16)は小田原市にいた。青山学院の中学部に通っていた岸井は肺を患い、七月二十一日、小田原へ移った。夏休みに入つての、とりあえずの療養ということではなかった。岸井は前年の十二月から休学しており、やがて都会生活は無理だと診断され、空気のよい場所の学校へと転校するつもりであった。「八月のある夜、地震とも雷とも何とも判らない音というか何というか、今までに経験したことのない一種の圧迫感におそわれた。勿論、一瞬である。」と記しているが、「直ぐに終わったので、戸外へ飛び出して見たが、戸外は何のかわりもなく、一人出てくる気配もなかった。」というところを見ると、気のせいだったのかもしれない。家の人も何も感じず、その後何の話題にもならなかった。だが、岸井は「あれが大地震の前ぶれの一つで、海鳴りとか地鳴りとかいうものではなかったのではあるまいかと思う。」と記していた。「八月三十一日は大雨で、その翌九月一日(土)は、からりと上がって暑いくらいに晴れた」日であった。朝食が遅かったので昼食を一時間遅らせようということで、親子六人二階へ上がり、父親と弟が将棋をさしはじめた時であった。

俄かの地震である。いつもよりは始めから大きい。僕は傍にいた妹の上に被災するようにして妹をかばった。父さんと弟は将棋盤を中にして頭を低くした。姉さんは隣の部屋にいた母さんと呼んだ。

地震はさながら、これでもかこれでもかというように意地悪く揺れて、まず壁が落ちて、あたりは土煙りになってしまった。耳も鼻も口も、穴のあるところは壁土で埋められてしまった。

そのうちに大きな音を立てて家がつぶれた。同時に屋台ごとすべり落ちるように池の方へ、もぐるように沈んで行った。その間、なんとも言えない人の声がかしていた。これが阿鼻叫喚(あびきょうわん)というのであろう。

揺れが一時おさまったので後ろを振り返ると、床の間の隣りのあたりから陽がさしていた。わずかに空いている隙間から外に出ると、そこには屋根があった。二階にいた筈が、大地に屋根が這い出しているのである。こわごわ、その屋根を歩いて地面へ降りた。続いて、弟も妹も、そして父さんも出たが、姉さんが「母さんが、母さんが」と叫んでいるので、父さんは、再び、その潰れた家へ引っかけた。「と記されている。やがて、父親が母親を担ぐようにして出て来た。その間も地面は休みなく揺れていた。ともかく一家六人が揃い、竹藪へ避難できた。あとから女中二人も姿を見せ、二匹の猟犬も鉄の鎖を切って逃げて来たという。岸井は、いわゆる家の潰れ方について説明している。

地震で柱が折れて、家が潰れるというが、僕が経験をしたところによると、この言葉は少しく間違つて取られてしまう。柱が折れるというと、柱の真ん中から折れる感じがするが、柱は折れない。柱は土台の付け根からはずれて倒れるのである。潰れるというと、その場の上から押し潰されたように思うが、そうではない。つまり、マツチ箱が潰れるように、柱全部が一方へ倒れて、それに屋根までが付いて行くのである。その倒れる方角は、地震のゆれ方や震源地の方角に依るのではなく、弱い方、柱の数の少ない方へ倒れるのである。だから僕の家も柱の少ない庭に面した方へ倒れて、裏はバカッとあいたのである。

それが正しいことは、往来へ出て見るとはつきりと分かったと岸井は続ける。ほとんどの家は両側から道へ向かって倒れていたというのである。「僕の家も、もし僕たちが御飯を時間通りに階下で食べていたとしたら、きつと庭へ飛び出したのであるから、飛び出した人を追いかけるようにして家が倒れて来たことである。つまり岸井一家は、親子六人全滅であった。その証拠に、階下にあった錫の菓子器が一枚の板のように潰れていた。」と記している。地震から少しつと、小田原の町の方に煙が上がった。山の手の足柄病院の方角にも煙が上がっていたので、父親は病院へ向かった。小田原には母方の祖母も一緒に来ていたのだ

が、疲労のため病院に入院していたのである。はたして煙は病院からのものであった。門前には遺体が置いてあったが、そのなかに祖母はいなかった。また、避難先でも祖母を見つけ出すことはできなかった。父親が帰って来てそのことを母親に告げると、「覚悟はしています。」といったという。夜は庭に蚊帳をつつて寝たが、なかなか寝つかれなかった。「空には無数の星が綺麗に光っていた。夜も更けたためか、十月か十一月にならなければ見られない筈の星が見られた。地震のことを暫くわすれて空を眺めていると、今まで鳴いていた虫の音がピタリと止まった。と、大地がユラユラと揺れた。揺れが終ると、また虫が前のように鳴き出した。これが何度も繰り返された。時には虫の音の止まるのが長びくと、却って心配になった。」とその夜のことを記している。

翌二日。余震は大分おさまつて来たので、潰れた家の板で四畳半くらいの掛小屋を作った。電燈がないので小田原提灯をさげた。父親は知り合いから米三升を買ってきた。「夕方に雨が少し落ちて来て心細くなった。」と記している。三日は、「朝から雨で、午後から大雨になった。」という。掛小屋の屋根からは雨が漏れてきた。岸井は屋根に上がって綿などで穴を埋めた。「雨の中を父さんは一升四十五銭で、お米を五円買ってきた。四十五銭は米騒動の時の相場である。」と記されているが、一升四十五銭で五円分というのはいささか半端の感がある。足柄病院の医師が、祖母の死を正式に告げに来た。四日、知人が見舞いに来て、潰れた家からいろいろの品物を取り出してくれた。大事な七十円のお金も焼けずに無事であった。夜の九時頃、東京から事務所の人が見舞いに来た。岸井の父親は弁護士で、法律事務所を開いていた。東京を三日の朝に発ち、東海道の線路を黙々と歩いて来たという。その人が語った、東京の事務所での被災状況も記されている。

茶の間で昼食をして、箸を置いたか置かないかの午前十一時五十八分、俄かの大地震で、全員が跣足で中庭へ逃げ出した。

左右を見ると、隣家の福山田の待合の屋根瓦が揺れるたびに、ずるずる、ずるずると下がってくる。一方は二階建の物置で、これは、ぐらぐら、ぐらぐら

とゆれている。

それでも潰れもしないで一旦おさまったので、裏門から出て、ぐるりと廻って表の電車通りへ出てみると、電線は切れて、電車は動いていない。

家は大きく揺れたが無事であった。そのうちに諸方から火の手が上がった。次第に延焼してくることが分かったので、避難することにした。

宮城前か日比谷公園へ逃げようと、その方角を見ると、銀座方面はすでに火の手が上がっているの、桜橋へ逃げ、それを左へ曲がって京橋へ逃げた。こゝまでは、それほどの人はいなかったが、京橋から皇居の堀端へ出る道からは、さながらラッシュ時のように途中で歩を止めることは許されない程になっていた。広場はと見ると、ここは、もういっぱいの人で、これ以上は却ってあぶないと見て日比谷公園へ急いだ。現在は第一生命保険になっている辺に警視庁があつて、この建物がすでに焼け落ちていた。

日比谷公園にも、かなりの人が避難をして来ていたが、なぜか皇居前広場のような混雑はなかった。

一日の夜は日比谷公園で野宿をし、二日の夜は弁護士会館に泊まった。そして、三日の朝に小田原を目指して歩き出したのである。事務所の弁護士は四日、五日と泊まり、六日の朝に東京へと帰って行った。七日になって、足柄病院から祖母の遺体を引き取りに来てくれといつて来た。翌八日、姉と女中が祖母の遺体を引き取りに行った。地震から丸一週間がたつ。遺体はすでに半ば焼けている。「おばあさんの遺体は、はつきりとは判らないが、位置からも骨格からも、多分これであろうというものを焼くことにした。なにぶんにも潰れて直ぐに焼けたので判然としない。」と記されている。骨壺がないので、植木鉢に骨を入れて姉たちは帰って来た。焼き代は十円だったという。夜中になり風が強くなり、波の音も高くなった。余震はその後も毎日のようにあつたが、この日には強い余震があつた。

小田原での生活はその後一か月あまり続き、九月二十九日に東京に帰った。療

養と転校のための転地であつたが、結局は東京に戻って来たのである。青山学院の建物は破損していたので、バラックを建てて、午前、午後の二部制で十月十日に授業がはじまることになった。だが前年の十二月から休学をしていたので、一年下のクラスに編入した。

尾崎一雄(注17)も小田原市にいた。早稲田高等学院の学生であつた尾崎は、小田原の実家に帰省していた。九月一日は朝寝坊をし、十一時過ぎに母親に起こされた。渋々起き出すと、隣家の留守番へ行くようにいわれた。弟妹は皆外出していた。隣家の山村家に着いたのは十二時十分頃だった。もうお昼だったからであろう、主人の政治さんがバターやジャムをつけた食パンを出してくれた。ほかに目玉焼きと輪切りのトマトもある。「それに手を出さうとしたとき、ミシリ、ガタガタと来たので、顔を見合しているとドカンと突き上げられ、二人共あぐらのまま飛び上がった。」という。「つづいて、横ざまに薙ぎ倒された。畳が生きもののやうに動き、部屋中の物が一度にたおれてきた。」と続けている。「でかいぞ!」「地震だ!」と叫ぶと、「濡縁から戸外へ飛び出した」。いや、「飛び出した、といふより、抛り出されたと言つた方がいい。」と記されている。「私は縁先にあるコンクリート製の水槽に左の向う躡をぶつつけた。しかし、転がりはしなかつた。政治氏は転がつた。そのとき、平屋建ての家が東側へ倒壊した。それ相当の音がした筈なのに、耳に入らなかつた。四方八方音だらけで、何が何だか判らなかつた。」とその混乱ぶりが記されている。外に出ても揺れは続く。「上下左右、滅茶苦茶に揺れる中を、出鱈目に動く遊動円木に乗った気で、踊りながら進み、どうやら梅の幹につかまることができた。」「ところが、その梅の木が、倒れさうになつた独楽の心棒のやうに揺れる。それに取りついてある二人は、右に左に振り廻される——。」と詳細に記している。自宅がどうなつたか気になつたが、もう少しおさまるのを待つしかない。五分たつたか十分たつたかした頃、二人は道路に出た。政治さんも外出している家族が心配だといひ、その場で別れた。自宅は潰れていた。「ふだんは道路のその場所からは見えぬ富士山が、くつきりと見えた。その下の足柄、箱根の山々にはところ嫌はず赤ハゲの山崩れが見えるのに、富士山だけは悠然と立って、秀麗な山容をほこつてゐた。」と記し、続けて「富士山

は偉い！」と思つた。同時に、大地が全部壊れてしまつたわけではないらしい、と心からの安堵感を覚えた。」とその時の気持ちを記している。幸い、母親は無事であつたが、腕から血を流していた。自分もまた血が出ていたが、どちらも大した怪我ではなかつた。絶えず地鳴りがし、ときどき余震が起こる。何をどうしたらいいのかわからなかつたが、やがて政治さんが細君と赤ん坊を連れて戻つて来た。まず何をすべきかを政治さんと相談したところ、第一に火を出さぬことだということになった。昼食時であつたため、どの家も火の気があつたと考えたからである。尾崎は壊れた家の中へともぐり込むことにした。

私の家の母屋は萱葺で、その春葺かへたばかりだつた。その一部をこはして、台所へもぐり込んだ。梁だの柱だのと、いろんな材木が入乱れた中に入ると、余震のたび、ゴソツとそれらが沈んでくる。どこかを挟まれてもしたら大変だ、とひや／＼しながら、母から聞いた火元に辿りつくと、コンロにかかつた菓罐がひっくり返つて、それで炭火は消えてゐた。思ひついて、茶ノ間の方へもぐつてゆくと、何も彼も滅茶苦茶である。どこから入る薄明りで倒れた用簞笥を捜しあて、財布を取り出すと、びくつき乍らも大急ぎでそとへ飛び出した。

火の始末を終えて出て来ると、朝から何も食べていないことに気づき急に力が抜けたという。昼に出してくれたバターパンや目玉焼き、トマトの輪切りを思い出していると、そうだと気が付いた。政治さんの家の菜園にはトマトが豊富になっている。そこで政治さんに断り、二人で畑に行き腹いっぱいトマトを食べた。それから尾崎は付近の様子を見に出かける。未だ帰つて来ない弟妹たちが気になつていたのである。幸い、途中で二人の弟に出会うことができ、家に帰るようになつた。付近の家はほとんどが倒壊しており、死者も出ているとのことであつた。尾崎はさらに駅前の方へと足を伸ばす。道路は地割れがひどく、ある個所は崩壊していた。道路の両側にある商店は一軒残らず倒壊し、死者の出た家もあつた。「下曾我駅もつぶれた。この九月一日をもつて開通したホームへの地下道も壊れ、ホームが落ち込んでゐた。ホームの簡単な上屋が、どうした加減か、木の

柱を空に向け、傘をひっくり返したやうに仰向けになつてゐた。線路の堤防がそれ自体の重みで半分ぐらゐ沈下し、両側の田圃がふつくとせり上つてゐた。」と駅の損壊状況を記している。散乱している商品の中からマッチ、ローソク、煙草などを買つて帰つたという。電信電話は一切不通で、全く状況が分からなかつた。ただ、二時か三時頃に飛行機が一機やつて来て上空を何度か旋回し、やがて東へ帰つて行つた。「あれは被害状況を見に来たのだ。あれが帰つて報告して、それから救援隊だ」とみんな喜んだ。」と記している。弟たち二人は戻つて来たが、妹がなかなか戻つてこない。女学生の妹はまだ夏休み中であつたが、学校の裁縫室へミシンの練習に行つたのだつた。四時過ぎた頃には我慢ができなくなり、弟の弘夫を学校へやることにした。「この頃には、あの奇怪な朝鮮人騒ぎの流言が入つてゐたやうに思ふ。」といつてゐる。弟を送り出したが、はたして無事にたどり着くことができるであろうか、また妹は無事であるうかと不安であつた。尾崎は次のようにその複雑な気持ちを記している。

嘗つて経験したことのない無力感に襲はれたが、それを通過すると、却つて一種の昂揚感を覚えたのは奇妙なことだつた。いきなり天地がひっくり返るやうな——やうなではなく、全くさう思つた。——衝撃。気がついてみると、とにかく自分は生きてゐる。地面は割れ、石垣は崩れ、土堤は平らになり、家といふ家は倒れ、といふやうな思つてもみなかつたことが一挙に現前した。それに対して、平常感覚の働いとまは無かつたのに違ひない。精神や神経の辻褄が合はなくなつてゐるのだらう。

「だのに、生きてゐる」——かういふ想ひだけが私共を領したのかと思ふ。それが変な昂揚気分を生んだのだらう。

六時半か七時頃になつて、弟と妹の二人が無事帰つて来た。これで全員揃つたので仮泊所のお寺へ向かつた。妹が語つたという話も記されている。以下は妹エイの体験である。

エイは、先生の許しを得て、女学校の二階の裁縫室でミシンを踏んでゐた。「ドシンと下から来たので、大地震だと思つた」とエイは言つた。部厚い板で頑丈に出来た裁縫机の下にもぐり込むと同時に、大きな音がして、いつぺんに暗くなつた。「つぶれたな」と思つたが、急に暗くなつたので、まるで様子が判らず、危なくてうっかり這ひ出すこともできず、暫くじつとしてゐた。身体中に意識を走らせたが、どこもなんとも無い。梁だの柱だの天井板だのが落ち重なり入乱れてゐるのがだん／＼と判つてきたが、頑丈な裁縫机はびくともしない。よかつた、と思つた。

裁縫室の階下は科学教室で、各種の薬品がある。それが火を出したら大変だと考え、裁縫道具を風呂敷に包み逃げ出した。「材木の間をすり抜けて、校庭に面した南側の窓の方へ這つた。二階も階下も総つぶれだが、窓から地面へやはり飛び降りなければならぬ。ガラスの破片がいっぱいだ。地割れもある。考へて、窓際の、アジサイの繁みに降りた。」と記されている。外へ出るとあちこちから煙が上つていた。正門の方を見ると、小田原城の石垣が全部崩れ、松や桜の巨木が倒れていた。学校を出て潰れた民家の方へ歩いていくと、あたりからはしきりと「なむあみだぶつ」という声が聞こえてくる。お経を唱えていたのは同級生の母親であつた。エイが裸足だったので、下駄を貸してくれたという。やがて小さな土手に辿りついた。そこには四、五人の人がいたが、これからどうしたものか考へが決まらなかつた。「こんな騒ぎなのに、人影の非常に少ないのが不思議だ。」という感想が記されている。また、土手から見た町の様子は、「道の向う角の小田原郵便局（現在そこには横浜銀行小田原支店がある）が竜巻を起して燃えてゐる。無数の紙片が空高く舞ひ上る。それと国道をはさんで向ひ合つた大きな本屋兼文房具店もさかんに燃えてゐる。」と記されている。やがて土手の方も熱くていられなくなり、あちこちの火事をよけながら東海道線の鉄橋の袂まで辿りついた。だが、鉄橋は橋桁が横倒しになり、レールが枕木をつけたままぶら下がつていた。そこに四十くらいの男の人が現れ、自分が先に渡るからついて来いという。無謀ともいえる行動だが、エイは家へ帰りたい一心でそれに従つた。その時の様

子は次のように記されている。「男は、エイの風呂敷包みと下駄を受取ると、レールを渡り始めた。エイもその真似をして、横になつた丁字形のレールの凹みに蹠を一步一步しつかりと入れて渡り出した。とき／＼余震が来て、レールが揺れた。そのたびに、枕木やレールにしがみついた」。無事渡り終えると男の人は去つて行つた。エイは自宅の方へと歩いて行つたが、その途中で先に使いに出た弟の弘夫に出会つたのである。エイにとつては兄であるが、その体験も記されている。「氣負い込んでエイを迎へに飛び出した彼が、上府中村千代部落を出端れようとする、四ツ角にたむろしてゐた七、八人の男たちに取囲まれた。手に／＼竹槍、木刀、中には日本刀を持つてゐる者もあつた。「どこの誰か」「何用でどこへ行く」といふやうな詰問を受けた。」と記し、「つまり、朝鮮人と間違へられたのだ。」と記している。

「朝鮮人騒ぎの流言」が飛びはじめたのは、午後四時か五時という時分であつた。「朝鮮人暴徒千二百人が押し寄せてくる」ということであつた。「戸塚のトンネル工事をやつてゐた奴らで、ダイナマイトなんかも持つてるさうだ」、「戸塚からここまでそんなに速く来られる筈はあるめエ」、「ぢやあ、熱海線トンネル工事の方だ」といった憶測が飛びかつた。「駐在所の巡査までがそれを信じて、上着の上にバンドをして帯剣を釣り下げ、ゲートルを巻き、防止の顎紐をかけ、目を血走らせて」いた。また、「二十人位の男たちが竹槍、木刀などで武装して氣勢を挙げた」が、「夜になつても、千二百人どころか、それらしいものは影一つ見せなかつた」。だが、警戒を怠ることはなかつた。「元氣のいい人たちは影一つ見を選んで、「決死隊」を組織した。別に二人一組の見張り役をつくり、これを部落の東西の入口に配置することにした。」という。尾崎は、「僕は仮小屋で不寝番をする。夜更かしの癖があるから適任ですよ。万一のことがあつたら叩き起すから、決死隊の皆さんは安心して寝ておてください。」と伝えた。だが、「私はそんなバカなことがあるものか、とタカをくくつてゐた。たぶん朝鮮人につらく當つてゐる連中が、その故に描く幻影に決つてゐる」と思つていた。十二時頃までは起きてゐる人もいたが、午前一時近くになると起きてゐる人はほとんどいなくなつた。その時に半鐘が鳴つた。「スリ半」という慌ただしい連打音であつた。「そん

なバカなことがあるものか、とタカをくくつてゐた」尾崎だが、「私はゾクリとした。身体中が冷えわたる感じだった。恐らく髪の毛など逆立つたかも知れない。」と記している。「起きろ」と怒鳴るまでもなく皆起き上がり、火の見櫓へと向かった。そこには二人の見張りがいたが、不審な人物を見かけたという。だが、結局は見知った人物であることが分かった。

翌二日、早朝から鉄道線路づたいに続々と人々がやって来た。「藤沢、大船、鎌倉、横浜と、時が経つにつれ東寄りの地区からの人々がふえた。すべて避難民であった。負傷者も多く居た。繃帯を血に染めて杖にすがる人、重傷者を背負った人——その殆んどは、いわゆる着のままで、有様だった。」と記されている。また、「それら避難者たちの口から、東京も横浜も全滅ときいたときは、皆実にながかりした。いつたい日本はどうなるのか、といった大所高所からの憂慮もあつたが、差当つての心配は、救援の手がこんな田舎まで果してのびるだらうか、といふこととどつた。」とも記している。だが、午後になつて、三島野戦重砲連隊の将兵が来た。「少数だつたが、兵隊が来た、といふそのことだけで、人心不安が大いに静まつたことは確かだ。」と記し、続けて「千二百人の暴徒」など根も葉もないことらしい、と人々は漸く納得した。」と記されている。しかし、三日、四日となつても新聞が来ないので京浜方面の正確な様子は判然としない。東京から逃げ帰つた人や避難者から入る情報はすべて次のような悲観的なものばかりであつた。

「隅田川は屍体で埋まつてゐる」

「本所被服廠跡では二十万人が焼け死んだ」

「社会主義者や朝鮮人が井戸へ毒薬を投げ込んだ」

「横浜の裁判所がつぶれて、裁判官、被告、弁護人、傍聴人の全部が圧死した」

号外のような新聞が来たのは一週間ほどたった頃であつた。先の話も誇張はあるものの、大体は本当であることが分かつた。隣家の政治さんは、両親や兄妹が東京にいるので東京に行くといふので一緒に行くことにした。「政治氏と違ひ、私の上京理由は薄弱で、いささか不真面目でもあつた。下宿がどうなつたか、そ

の下宿に置いてある本は無事かどうか、といふこと、山村政治の肉親たちの安否を政治氏と見届けたい、といふこと、東京の様子をこの目で見たい、といふこと——それらが合さつて、私を上京に踏切らせた。」と記している。発つたのは八日か九日であつたという。米や鯉節を十分に持つて出かけた。その道中についても詳しい記述があるが、割愛する。ただ、真偽はともかく次にあげる記述は興味深い。

歩くうちに、震害がまだらになつてゐることに気づいた。どこがどうだつたか、もう正確には言へないが、例へば、国府津がひどければ次の二宮はさほどでなく、さらに次の大磯がひどい、といった工合なのだ。連隊旗や海軍旗が、中心から白赤と一つ置きに色を放射してゐるやうに、震源からの力の放射も、一条置き、といふ感じがした。

二日目には政治さんの両親らがいる神田に辿りついた。家族は全員無事であつた。政治さん一家の無事を見届けた尾崎は下宿へと向かう。神田の古本屋街は全滅で、「そこには、なじみの本屋が多くあり、どの店の、どの棚に、どんな本があつた、などといふことを想ひ描いた。あれが全部焼けてしまつた……。」とその時の気持ちを書いてゐる。下宿に着いたときはもう暗くなつてゐた。下宿は焼けも倒れもせず、本も無事であつた。自室へ入ると八畳の部屋の真中に「本のピラミッド」ができ、床の間にも本が並べてあつた。女中の話によると、またいつ地震が来て本棚が倒れるといけないのでそうしたのである。その晩はそこに泊まり、翌日政治さんの家へ戻るが、途中で学院や大学もざつと見た。「大講堂がつぶれ、古い文学部教室は傾き、理科の実験室は焼ける、といふやうな被害があつた上に、下町方面からの避難民も居て、当分学校はだめらしい、と思つた。」と記している。いつの日の何時頃かははっきりしないが、尾崎は政治さんと一緒に本所方面へ行つたという。「本所側は被災後の処理がずつと遅れてゐて、荒涼たるものだつた。川つぷちに屍体が引上げられ、トタンがかぶせてあるのをとき／＼見た。川岸に何人が集つてゐるので寄つてみると、岸に張りつくやうにな

つた屍体を引き上げようとしてゐるのだつた。」と記し、続けて「焼けた太い樹の上の方の脛にトタン板がはさまり、風で音を立ててゐた。電線に赤い大きな布がひつかかつて、はためいてゐた。屍体は男か女か判らぬのが多かつた。」とその悲惨な状況を記している。やがて二人は被服廠跡に到着する。そこはさらに悲惨であつた。

積み上げられた屍体に石油か重油をかけて焼いたのだ。その上に焼けたトタンを集めて覆ひがしてあるのだが、それも不十分で、半焼けの身体が見えてゐたりした。

何十人何百人が一と山となつてゐるのだらうか。さういふ山があつちこつちにもあつた。山の前に花が飾られ、線香が煙を上げてゐた。

政治氏は「なむあみだぶつ」と呟いた。余程参つたらしい。山の裾の地面には、水溜りのやうなものができてゐて、それは屍体からにじみ出た脂に違ひなかつた。

被服廠跡と道路の間に、幅二米ぐらゐの長い掘割があつて、その水面に、ゴム手袋のやうなものがうかんでゐた。随分大きなゴム手袋だな、とよく見ると、それは掘割の中の屍体の、掌の皮だけが分離して浮いてゐるのだつた。水でふやけて、大きくなつたのだ。そんなのがいくつも目についた。

それから二人は浅草に行く。だが、「十二階が上の方で折れてゐるのが見える。」という記述があるのみである。次に足をのぼしたのは上野公園であつたが、ここでも「避難民が大勢居た。」と記されているだけであつた。「以上の歩き廻りで、異様な光景の数々を見たが、被服廠跡のことを記すだけで沢山だと思ふ。」と尾崎は記している。ただ、街を歩いていて気が付いたことがあつたという。焼け残りの電柱や立木に貼られているビラを見てそう思ったというのである。「暴徒」や「朝鮮人」が、不逞の行動に出る懼れがあるから注意せよ——井戸水には毒が投入されたかも知れぬからうっかり飲むな——そんな意味のビラがある。それに警察が署名してゐるのもあつた」が、「同じ電柱や立木に「みだりに暴力を振

るつてはならぬ」「朝鮮人に保護を加へよ」そんな意味のビラが、同じ警察の署名で貼つてある」ものがあつた。それを見て、「前のが先づ貼られたのだと判断された。それが、自警団の行過ぎ、また「自警」に便乗しての暴力行為がひどくなるに及んで、あとのが貼られたのに違ひない。」と判断されたということであつた。その夜も政治さんの家に泊まり、翌日二人で小田原へ向かつた。三日たつただけでが鉄道の復旧工事はかなり進み、途中一泊せずに帰つて来られた。なお、尾崎の自伝には、小田原の家付近の手書きの地図や、小田原の鉄道被害や崩壊した浅草十二階の写真などが掲載されていた。また、小田原警察署が調べた被害状況を記した「震災調査表」も掲載されていた。

片岡仁左衛門（注18）は大磯町にいた。まだ千代之助を名のつていた歌舞伎役者十三代目仁左衛門は、極度の神経衰弱と肺を患い、七月の中旬に大磯の別荘へと移つていた。「その日もちようど午前の休養時間で、眠りから醒めようとしていた時でした。恐ろしい地鳴りが西の方からゴォーッとしてきたかと思うと家がぐらぐらと揺れてきました。」と記している。仁左衛門が休んでいたのは十五畳敷きの部屋であつた。

さて、その大きな部屋が大変な揺れ方で、吃驚して飛び起き廊下へ出ようとなりましたが、捻じれたためかドアが閉まって開きません。窓の外の廊下には父が蒼白な顔をして窓の鉄棒につかまりながら、

「早よう外へ出んと危ない、危ないッ！」

と必死に叫んでいました。どうしても出られない。庭の方の縁側から出ようと思つても足がもつれて行けませんし、第一、父のいる方へ出たいのが人情、さうこうするうちに家の揺れ加減でかドアが自然にスーッと開きました。天の助けと廊下へ飛び出し「お父さん!」「倅ッ!」と抱き合つて裏庭へ飛び出すのと同時に、今まで立つていた廊下の梁が落下してきました。まさに間一髪危ういところで下敷きになるのを免れて助かつたというわけでした。

裏庭から玄関前にまわり、門の前の広い野原へ逃げ込んだ。そこに母親も逃

げて来た。家の方を見ると、「二階建てだった家が土煙の中に隠れ、その屋根を見出すことはでき」なかった。「地震は午前十一時五十八分に起こったのですが、一時すぎまで<sup>あた</sup>辺りが真つ暗になったまま、揺れが少し静まってから家の方へ行ってみましたが、とても口では言いあらわせない状態で、ただ呆然と立ちすくんでいました。」と記している。そのうちに、出入りの鳶職が駆けつけ、壊れた柱や戸を使って庭に掘つ立て小屋を建ててくれた。翌日からは、同じ大磯にある知人の別荘に住まわせてもらえることになった。二日たち、三日たちするうちに東京のことが知りたくなつたが、通信機関が途絶していたので情報を得ることができない。だが、七日目の夕方になって、弟子と男衆が東京から歩いてやって来た。東京の本宅は全焼したとのものであった。それから二日ばかりすると、東海道線の茅ヶ崎から品川まで汽車が運転されることになったというので、本宅を見に行くことにした。程ヶ谷まで来ると列車が長時間停車した。その時、沿線から何かしら悲鳴が起こり大いに驚いたが、何かのいたずらであつたようだという。「東京で「朝鮮人の不穏な動きがある」などとデマがとんでいた時でしたから一層びっくりしたのかもしれませんが。」と説明を加えている。列車は夕方に品川駅に着いた。その夜は中野の知人の家に泊まり、翌朝本宅の焼跡へ行った。「全く見渡すかぎりの荒野になっていました。」と記されている。

高橋誠一郎(注19)もまた大磯町にいた。慶應義塾大学の教授であつた高橋もまた肺を患い、父親に建ててもらつた大磯の山荘に来ていた。「地震と気付いたときには、父はもう、廊下から庭へ投げ出されていた。父の上に、ガラス戸がはずれて落ちかかり、顔からは血が出ている。驚いて庭へ飛びおり父を抱き起こしたが、歩くことができない。何基かの石灯籠はみなくずれ落ちている。よくもその下敷きならなかつたものだと思う。」と記している。また、「その前日、横浜から大磯へ泊まりがけで来ていたのが、せめてもの仕合わせだった。横浜の家に行ったら、どうなつたか知れなかつた。」と記されている。その横浜の家は焼け落ちていた。「父が晩年最大の楽しみにしていた日本画の蒐集と、私が長いあいだにボツボツ買い集めた書籍は、大磯の山荘に置いたごくわずかのものを除いて、全部<sup>うぐ</sup>鳥有に帰してしまつた。」と付け加えられている。

姉崎嘲風(注20)は鎌倉市にいた。姉崎は東京帝国大学の教授であつた。「東鑑<sup>あずまかがみ</sup>に書いてある正嘉元年大地震のそのままを鎌倉でみた。東鑑に書いてある通りの惨害が、自分の身の廻りにおこつた。」という、少々変わった書き出しでそれははじまる。「丁度昼食の時であつたが、御飯を食べかけていた家族らには、じつと坐つているように命じていると、そこらが地震というよりは、地の底から大きな槌で叩いたような音がして、向いの家が倒れては崩れて、土煙の立つのを見た。」とあり、続けて「地震がすんで火の用心をさせて外に出て見ると、自分の家は立つていたが、近辺の家はみな倒れていて、地震の音がやむと、近辺から色々の叫び声が出た。」と記している。隣の家では、「女中が、坊ちゃんやんが土に埋つた、と叫ぶので行つて見ると、山崩れの下に子供は敷かれて、どつさり土が蔽いかぶつてい」た。また、「上の方でも人が埋れているというので行つてみる」と、絵描きの家が倒れてその中から助けを呼ぶ声が出た。あちこちから助けを求め声が出たが、助ける方法がない。そこへ、大工さんが鉄の棒のようなものを持って来たので、それを借りて埋れていた人を助けたというが、その詳しい記述はない。二日ほどして東京からの便りを聞くと、大学では図書館をはじめ教室などもみな焼けたということであつた。後に東京へ帰ってみると、「図書館は壁が残つているだけで、自分の教室はみな焼けたが、意外な事には書物はみな出ていた。」という。「高等学校か何かの学生が会をやつていたのが、助けて出してくれた」とのことであつた。ちなみに、姉崎は震災の年を一九二二年と誤つて記し、掲載されていた写真のキャプションにも一九二二年と記されている。「大震災に焼け落ちた東大図書館にて」と記されたその写真には、瓦礫の中に腰かかっている本人の姿が写っている。

小泉信三(注21)も鎌倉市にいた。慶應義塾大学の教授であつた小泉は、自宅の二階の部屋で机に向かつていた。「正午の号笛が鳴つたとき、私は時計を見て、隣の部屋にいた妻に「家の時計は遅れてゐるね」といったという。この部分には括弧付で、「公けの記録では震動開始は十一時五十八分とのことだが、正午の号笛が鳴つたとき、まだ吾々は感じないで、こんな会話を交換した。」と記されている。小泉の勘違いだったのか、「号笛」そのものが早く鳴つたのかは分からない。

それはともかく、そういう終るや否や震動が起つた。「吾々はすぐ、たゞ事ではないと感じた。地震嫌ひの妻を、左腕に抱へて、階段を滑るやうにして降りた。両側の壁が落ちかゝつて来る。辛うじて降り切つて、僅か八畳の間を横ぎつて、庭へ飛び出さうとするのに、足を取られて、進めない。箆笥が両側から倒れかゝる。妻はあきらめたか、そこに蹲まらうとする。それを掴んで持ち上げて、縁側まで引きずつて来た。」と記している。妻を無事縁側まで連れて来たが、子供はまだ家の中にいるはずである。そのことを妻に促された小泉は、妻を庭に放り出して子供の救済に向かう。「すぐ引返して、子供等のゐた筈の女中部屋へ飛び込んだ。子供はゐず、灰色の壁と、針仕事の引き散らしてあつたのが、ハッキリ目に映つた。次の瞬間、跣足で井戸端へ飛び出してゐた。すぐそばの玉蜀黍の畝に、六つになつた子供は、一番年上の女中に抱かれて泣き叫んでゐた。」と記されている。子供はもう一人いた。二つになる女児で、下駄を買いに女中と一緒に出かけていた。幸いその子供も平気な顔をして帰つて来て、皆の顔がそろつた。やがて半鐘が鳴り出し、幾条かの煙が見えた。「この間にも、大地は殆んど絶間なく揺れた。」とあるが、続けて「震動がやむと、合間合間に、山で蟬がなく。たゞこの蟬の声だけが、遠い昔の世と今とを繋ぐもののやうに感じられた。」と、やや叙情的に記している。夜になると、「戸板で屋根を葺き、蚊帳を釣つて、家中の者が入つて寝た。」という。「耳を地につけてゐると、海の方から地鳴りがして来る。それが近づくと、地は浮き上り気味に揺れる。それが幾度となく繰り返されてゐる中に、天が明るくなつて来た。」と記している。

星野天知(注22)も同じく鎌倉市にいた。星野は、『文学界』創刊のメンバーで、明治中期から活躍していた文学者である。大正十二年は例年より暑い夏で残暑も厳しく、九月一日は「早朝から厭に重苦しい暑さ」だったという。自宅の客間で泊り客と用談中に地震は起きた。「突然東南の海上から大鳴動が追ッ被さるやうに襲来するや否や劇震が来た。」と記している。続けて「立上る客を制して軒端を視た。硝子戸が蹴り出して、弓を放つやうに外れ飛んだ。他の硝子は砂のやうに揉まれ落ちるし、障子紙は漣波のやうに揉み切れ、庭は一面に微細な土煙りを立てゝ居る。」と記されている。これは尋常な地震ではないと思ひ、一同に庭前

に飛び出すよう叫んだ。その時に第三震が襲来し、「四圍がバツと明るくなつた。」という。「邸内の二階家や丘上の洋館が一時に転覆した」のである。「二棟の平屋居宅が、二十四五度のめり出たり又起きたり、四五回も揺り動かされて、壁は抜け、天井は垂れ下がり、床は抜け、椽は外れる。」とその破壊情況が記されている。それと同時に三人の娘と二人の息子、妻もようやく姿を見せた。もう一人の娘がいなかったが、「軒を潜り屋根を踏み、隣荘から怪我した末娘」を見つけ出し救出した。それから近隣救助に奔走し、直ちに人を走らせて食料の買い集めに着手した。「早手廻しの積りでも白玉粉二百本を獲たばかりであつた。」と記しているが、「白玉粉二百本」というのは決して少ない量とはいえないであろう。「薪炭、塩、醤油、梅干の貯蔵はあり、井戸に水あり、畑に茄子あり」ともあるから、当面の食料には心配はなかつたであろう。夕方になり、「土芥と煙とで楮黒かつた空も、明澄たる星空」となつていった。「折から鮮人暴動の蜚語が聞こえ始めた。」と記されている。翌朝、暴徒が襲来するとの報があつた。

隣人が其鬪争状況の目撃談を伝へてくるし、一方には海嘯襲来の警報で前の畑地へ避難に集まる人が充満した。警官は行方不明で、町には自警団が組織されて、抜刀で巡廻する。警報係りが時々警報を触れて来る。私も壮丁を集めて団長となるといふ有様、其夜は徹夜、激撃の悲愴な決心をする程であつた。深夜一発の銃声が響いて、潜伏群が騒めくと見る間に、走り出した大男一人、警戒線内に躍り込んだから、己れと思つて立上つたら米国人であつた。街からは自警団三名が抜剣を杖にし、鉢巻、襷で巡廻して来た。

翌日、知人の高浜虚子の家に妻子を預け、一人だけ残つて警戒に当たることになった。「雨が断続的に降り出す。此日の激撃気分は男子ばかりなので、僅か五人だけが少々面白味を感じた。」と少々不思議な感想を記し、「虚子君とは知合ではあるが、此夜その家に避難の事があつてから、愈々親しいものになつた。」と付け加えている。何日のことかは記されていないが、その後、娘や息子を軍艦に便乗させて関西に向かわせた。星野自身は九月二十一日、高浜虚子とともに郵

船に乗り関西に向かった。

富崎春昇（注23）は横須賀市にいた。地歌奏者であった富崎は、横須賀にある岩崎俊弥の別荘に行っていた。岩崎俊弥は三菱財閥二代目岩崎之助の次男である。毎年夏には岩崎の別荘で避暑をさせてもらっていたが、この年も七月初めから八月いっぱい丸二か月滞在していた。九月一日。岩崎の奥様から琴の糸が切れたから締めおくれと言われ、締め終った頃にはもう昼近くになっていた。「それでお昼食を頂いてから出掛けるつもりで、何んと無くぐづぐづして居た時、いきなりグラ／＼！ と、何んとも云えない恐ろしい地響きと一緒に、建具の外れる音、壁の落ちる音、天地がでんぐり返るような気持がして、私は坐っていた絹座布団の上から江り転んで、二三尺も投げ出されようでした。」と記している。すぐさま外に逃げ出そうとしたが、外にいた人から「動いちやいけない！ 凝つとしてなさい」と声をかけられた。盲目の富崎がむやみに動いては危険だと判断したのであろう。どのくらい時間がたったか、少しおさまったところに誰かが庭まで抱えるようにして連れ出してくれた。「私はま／＼して庭の真中辺の芝生の上まで来て、ペタン！ とへたり込んだ。「その途端、二度目の大きいゆり返しが、ぐら／＼と来かと思うと同時に、さつき行きかゝった裏の崖のあたりが、ドドド——ツと崩れ落ちる音が聞え」た。一時間くらい庭に坐ったままだったが、それから男衆の背におぶさり裏山の上まで昇って行った。そこにはいつの間にか小屋が建てられ、畳まで敷かれていたというが、にわかには信じ難い記述ではある。岩崎も奥様も無事であった。その晩から小屋での生活がはじまった。「九月に入つたばかりですから寒くもありませんし、別荘には鶏も野菜もあり、海からはお抱えの漁師が魚を届けて参ります。それに倉庫には米俵が詰つて居りますから少しも不自由」はしなかったという。二日の夕方になり、岩崎の本邸から使いの者が来た。本邸は無事で、富崎の家も家族もみな無事であることが分かり、安堵の胸をなでおろした。だが、乗り物も一切なく、不自由な体ではどうすることもできなかった。

十月初めになって乗り物もどうやら動き出したので、道中大変な思いをしなが三か月ぶりで東京に帰ることができた。妻も子供たちも飛びついて喜んでくれ

た。「東京の下町方面は全滅、山ノ手も相当の被害とき、自分たちは無事でも、暢気に楽器など弄つては居られません。それにこんな際、お稽古に見える人も無いでしょうから、私は一策を案じまして、美喜と二人で街に出かけて、被服廠跡の記録写真や、その他の惨禍の写真帖など、一冊三、四十銭位いのものを百冊ばかり買い集めて帰りました。」と記している。美喜とは妻であるが、それから二人は未だ混雑していた汽車に乗って大阪へ向かう。富崎は大阪生まれでもともと大阪に住んでいたが、岩崎が大阪を引き上げ東京に帰る際に誘われ、東京に来て来たのであった。大阪では弟子の家に滞在し、旧知の人たちと無事を喜び合った。「そして、それらの人々へ、東京から買って来た、例の震災記念の写真を、一冊一円づつで売り付けた」。「それと同時に、何でもよい、要らない衣類をうんと沢山持つて来て呉れるよう頼んましたら、集まるわ、集まるわ、手荷物位いでは到底持ち帰れん位い沢山集まった。それを小包で東京に送り、困窮している人に直接配ったという。市役所などへ持ち込むよりもその方が手取り早いと考えたのである。写真帳を売ったお金ももちろん配った。十二月の暮れも押し迫った頃であった。

先ず最初、ひどいブラック建てに住んでいる人たちの中へゆき、「この辺りに何々さん云う人、知りませんか？」などと出鱈目な名で人を尋ねる風をして、それから「どうです？ 困りましたでしょうか？」と話しかけ、その辺りの人たちの困窮状態を探った上で、寒空に着る物一ツ無い人には衣類を、職の無さそうな人には三円、五円と、その状況に応じて配って歩きました。そんな事を、何日も続けました。自分が困り果てた事のある私は、そうして人の喜んで呉れるのが無性に嬉しくなりました。配り歩いてる間、よく名前を訊かれますが、子供たちにも、決して名前を云うんやないで……、と固く止め置きました。

大晦日もあと四、五日というある日、亡くなった師匠のお嬢さんが訪ねて来た。「震災に遭い、被服廠跡へ逃げ込んだきりご主人と離れ離れになつて、裸のまま、

赤ん坊と二人、命からがらやつと助かったが、それ以来、主人は行方不明になる、赤ん坊を連れて、はろ、く、な働きも出来ないで、ウロ／＼するばかりやった」という話であった。三日も物を食べてないというのでご飯を食べさせ、大阪へ帰りたいというので汽車賃を渡したという。

小牧近江(注24)は横浜市にいた。震災の前々年に『種時く人』を創刊し、プロレタリア文学運動に邁進していた近江は横浜に居を構えていた。だが、震災発生日のことについては何ら記されていない。記述があるのは翌二日のことである。「九月二日、私は東京の両親のところへ歩いて行きました。六郷の鉄橋を渡りましたが、一人の歩哨の影もみませんでした。もし朝鮮人の暴動が起きていたのが本当なら、軍隊が鉄橋を守っていたにちがいありません。このことをもつても、まったくおかしな話で、他民族にたいして申し訳ないことです。」と記している。続けて「東京に向ったわけは、両親の安否が心配だったのと、横浜が危なくて、家におれなかったためでした。」とその理由を説明しているが、「横浜が危なくて、家にはおれなかった」のは、家屋が被害を受けていたためではない。「神奈川管下にいる要視察人は、中村という人と私の二人であったそうで、私たちの家は竹槍で囲まれ、生きた心地がしませんでした。それで、家を脱けだし、親戚の家にかくまわれたのですが、そこも危なくなつたので、東京へ向ったの」であった。他に「亀戸事件」や大杉栄が殺されたことについての記述はあるが、体験としての記述はこれだけである。

杉山金太郎(注25)も横浜市にいた。杉山は中外貿易という会社の専務取締役をしていたが、震災の年の春に倒産し、いわゆる浪人中であった。人を見送りに横浜の波止場へ行っていた杉山は、東京へ行く用事があつたので出帆の十二時少し前に人力車を雇った。正金銀行の裏にある日盛楼という西洋料理屋まで来た時である。「何とも知れないゴォーツといふ音がして来ました。地震が揺れる瞬間と、俵屋が「地震です」と言ふのと道路の罅割れが見へる瞬間とほとんど一緒でした。「まん中を通れ、危ないぞ」その瞬間に両側の家が頭の上へ落ちかかつて来て、しばらく目が見えませんでした。ところが、右側にあつた大きな赤煉瓦の蔵が壊れて頭の上へ落ちてきました。」と記している。杉山は氣を失つたのであ

ろうか、「ややしばらくして目が覚めて見ると、私の肩に煉瓦の大きな壁が載つてゐる。俵屋は梶棒を持ったまゝ突つ臥して、これも大きなやつを背負つて倒れてゐる。」と続けている。杉山は人力車もろとも下敷きになつた。「降りようと思つてもなか／＼降りられない、煉瓦のかけらを掻きぶつてつき落して、腰をひねつて降りた。」という。俵屋を呼んだが返事はなかつた。俵屋はすでに息絶えていた。それから桜木町の駅まで歩いて行つたが、駅は倒壊していた。すでに五、六か所から火の手が上がっている。そこへお巡りさんが来て、「あなた頭が大分出血してゐますよ」といわれた。「この辺にお医者さまはありますか」と聞いたが、「それどころぢやありません。あなたのお宅がこちらにあるならば、早くお家にお帰りなさい。」といわれたので、急いで家に向かつた。幸い自宅は倒れていながつたが、屋根瓦は全部落ちていた。家内がまだ家の中にいたので、庭の隅に避難させた。そうこうしているうちに出入りの大工がやつて来た。火の手がだんだん迫つてきているので、早く避難した方がいいというので、大工に連れられて横浜の貯水池へ逃げた。夕方までそこにいたが、だんだん暗くなつてきたので義弟の家へ行つた。義弟の家は何の被害もなかつた。しかし、依然として余震が続くので、庭に布団を敷いて一夜を過ごしたという。

十五日ほどたち、郵船会社の上海丸で神戸へと避難した。神戸に着くと、慰問団や女の人が道の両側に並んで鉛筆や紙、あるいは歯ブラシなどをくれた。それから泊まりつけの宿屋へ向かつた。頭の怪我で包帯をしていたので、宿屋の人は最初分からなかつたという。やがて杉山は単身東京に出て来るが、それがいつのことだったかは記されていない。

川喜多かしこ(注26)もまた横浜市にいた。川喜多はフェリス女学校の学生であつた。「私の家は最初の大揺れで平らに潰れ、二度目の揺れ返りで屋根にぼっかり穴があいた。」と記されている。続けて、「簞笥の下に集まつていた一家は、その穴から外に逃げ出ようとしたが、私だけは腕を簞笥と梁との間にはさまれて身動きができなかつた。倒れかかつた簞笥を押えた腕の上に梁が落ちて来たのである。直径一尺近い梁は家中かかつて持ち上げようとしてもびくともしない。」と記している。やがて、火の手が上がつたという叫びが聞こえた。「出られる者は出な

さい」といったが、「姉さんが出るまで私は出ないわ」という妹の言葉に胸を打たれたという。祖母も「私はもう年寄りだから最後までこの子と残ってやる」といつて出なかつた。そのうちに、鋸を借りに外へ飛び出して行った叔父が小さな鋸を手に入れて戻って来た。叔父は走り通して来たのか息が切れて動けない。そこで母親が鋸をひきはじめた。母親がひき終ると、今度は七十になる祖母が柱をテコにして梁を楽々と持ち上げてくれた。「つぶされていた二の腕は百枚綴じの原稿用紙くらいの厚さになって紫色に変色していたが、幸に骨は折れていなかった。」と記しているが、「百枚綴じの原稿用紙くらいの厚さ」というのが面白い。

その時にはもう空は暗くなり、火の手も迫って来ていたので、手回りの物をかき集めて屋根の穴からはい出した。「一家の無事を喜び合った私達は父の身を案じながらも、荷物をまとめて近くの広場に避難した。」と次に記されているが、父親が何で不在だったのかは記されていない。少し後に、「震災は横浜から多くのものを奪い去ったが、私の一家からも父を奪っていった。」とあるから、震災時に何らかの形で命を落としたことは確かであろう。これまた何で亡くなったのかも記されていない。震災後は神戸に移り、一時神戸女学院に籍を置いたが、やはりフェリス女学校がなつかしく横浜に戻って来たという。

松本望（注27）も同じく横浜市にいた。松本は西川楽器というピアノとオルガンを製造する会社に勤め、震災時は工場にいた。

九月一日、午前十一時五十八分。全く突発的に起きたのです。

ちようど、昼食の時間で、ラーメン屋の出前が来て、机の上に並べた瞬間、それこそ、百雷が一時に落ちたような騒音が耳をつんざいたのです。

工場に並べてあったピアノや、オルガンが次々に倒れ、棚の上の部品が、バラバラッと落ちてくる。

私は思わず作業台の下に、もぐりこみました。

その時、メリメリッという不気味な音と共に、工場は見る見るうちに「くの字」型に曲ってしまいました。

私は、思わず「神様」と口ばしりました。

工場はほぼ全滅したが、小高い丘の上にあった自宅は何の被害もなかった。「夜になって、丘の上から下界を眺めると、その光景は正に、暴君ネロに焼き滅ぼされたローマを思わせるものがありました。」という少々突飛な記述があるが、そのあとに、「ローマの街が燃えつづける最中、ネロは自宅のバルコニーで、トロヤの陥落の歌をうたっていたという話」を父から聞いたことを思い出し、ネロと同じく自分も「——もつと燃えたほうが……。なんと素晴らしい景観……。対岸の火事……。」と心で思っていたと記している。

食料事情が悪くなる一方で、田舎に郷里のある人はできるだけ帰るようという市の条例が出た。郷里までの汽車賃も途中の食事代も支給されるという条件であった。九月末、神戸の実家に帰ろうと決意したが、東海道線は未だ不通である。そこで上越線経由で帰ることにし、上野に向かって歩きはじめた。「街の惨状は、目を覆うばかりでした。」「一カ月経っているのに、まだ焼け残りの家屋の間からは、煙のにおいとも、何とも得体の知れない悪臭が、ただよっていました。」とその時の様子を記している。一日がかりでようやく上野駅に着いたが、駅は客でごったがえしていた。乗ったのは無蓋の貨物列車であったが、鈴なりにぶら下がっている人々もいた。高崎を過ぎたあたりで、列車の屋根に乗っていた人がトンネルに頭をぶつけて何人かの人が転落したという。屋根つきの列車も連結されていたのであろう。新潟を経て日本海側の直江津から福井を通り、敦賀から近江へ出てやった琵琶湖を見ることが出来た。神戸の駅に降りた時には、飢えと寒さでふらふらになっていた。やっと家にたどり着いた時には、皆びっくりして声を立てて泣いたという。

注

(1) 大川博『この一番の人生』（実業之日本社 一九六三）

(2) 中村歌右衛門『歌右衛門自伝』（秋豊園出版 一九三五）

- (3) 片山哲『回顧と展望』(福村出版 一九六七)
- (4) 手塚富雄『一青年の思想の歩み』(要書房 一九五二)
- (5) 江口渙『続・わが文学半生記』(春陽堂書店 一九五八)
- (6) 木村毅『私の文学回顧録』(青蛙房 一九七九)
- (7) 町田敬二『ある軍人の紙碑 剣とペン』(芙蓉書房 一九七八)
- (8) 麻生磯次『喜寿回顧 教員生活五十年』(明治書院 一九七四)
- (9) 猪田喜三郎『流れゆくうつせみ』(私家版 一九七〇)
- (10) 宮嶋資夫『遍歴』(慶友社 一九五三)
- (11) 及川道子『いばらの道』(紀元社 一九三五)
- (12) 高木市之助『国文学五十年』(岩波書店 一九六七)
- (13) 石井源一『七十年の回顧』(百年社)
- (14) 山田弥一郎『牛歩七十年史』(大和書房 一九七七)
- (15) 関根弘『針の穴とラクダの夢 半自叙伝』(草思社 一九七八)
- (16) 岸井良衛『大正の築地っこ』(青蛙房 一九七七)
- (17) 尾崎一雄『あの日の日上・下』(講談社 一九七五)
- (18) 片岡仁左衛門『役者七十年』(朝日新聞社 一九七六)
- (19) 高橋誠一郎『回想九十年』(筑摩書房 一九七三)
- (20) 姉崎嘲風『わが生涯』(養徳社 一九五一)
- (21) 小泉信三『思ふこと憶ひ出すこと』(新潮社 一九五六)
- (22) 星野天知『黙歩七十年』(理文閣 一九三八)
- (23) 富崎春昇『富崎春昇自伝』(演劇出版社 一九五四)
- (24) 小牧近江『ある現代史 〃種蒔く人〃前後』(法政大学出版局 一九六五)
- (25) 杉山金太郎『顛起七十年』(実業之日本社 一九五一)
- (26) 川喜多かしこ『映画ひとすじに』(講談社 一九七三)
- (27) 松本望『回顧と前進 上・下』(電波新聞社 一九七八)

一三六五二〇四八)の助成を受けた。

付記 本研究は、日本学術振興会科学研究費(挑戦的萌芽研究 課題番号